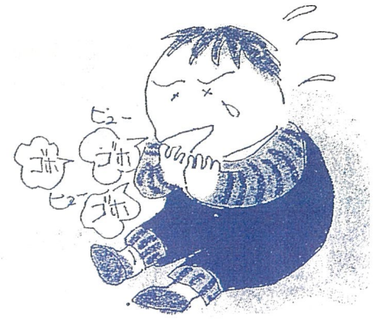
住まいの空気



この人と30分

ぶらり訪問㉚

訪問インタビュー第三十回は、シックハウス症候群のその後につき、当分野の権威者である眼科・宮田幹夫先生に実状をお伺い致しました。

守られない「ガイドライン」

Q、新築住宅をめぐる健康被害の現状をお教え下さい。

マスコミ報道でご存じのとおり、平成十年三月、官民合同の「健康住宅研究会」により室内空気汚染の低減のための「設計・施工ガイドライン」、「ユーザーズ・マニュアル」が発表された後も、困ったことに新築住宅をめぐる健康被害が続いています。

これは元請け、下請け、孫請けと複雑な現下の受注形態のなかで、各々の利益確保をめぐり選定資材、施工方法等に適性を欠く一部の不心得業者が原因のひとつになっているようです。

結局、基準値が守られていないわけですが、化学物質の一番の悪玉はホルムアルデヒドと有機リン系の化合物です。

一因は、高気密・高断熱

Q、シックハウスと先生のご専門の眼科との関係をお教え下さい。

かつて私は農薬の慢性中毒を研究していましたが、感覚器、特に視覚器というものは、非常に中毒に弱い。あの水俣病にしても、スモン病にしてもステロイドホルモンにしても、薬害はまず目に障害がでてきます。

眼科の領域に神経眼科があり、中枢神経と目の関係を追求する観点から両者の因果を解明することになります。

はじめは農薬中毒の延長線上の問題と室内で使用する一般の家庭用化学薬品の問題からスタートしました。いざ蓋を開けてみると、室内の空気自体がすごく汚染されていることが分かりました。それがここ十年位前の事でしょうか。

結局、省エネ発想の一番安易な方法として経済性最優先、健康問題無視の断熱材等の使用に至ったわけで、いずれにしても従来の資材やシステムをそのままにして、住宅の気密性だけを非常に高めたところに健康被害の一因がありますね。

問題となるのは可塑剤

Q、具体的に生活の中にどんなものが入り込んでいるのでしょうか？

これが大変なんです。ホルムアルデヒドひとつをとっても、木材の防腐関係はもとよりウレタンフォームからも放散します。有機リン系化合物にはシロアリ駆除剤、畳の防虫シート等があります。

元来、畳は日本人が発明した優秀な建築材料なのですが、近頃では使用方法を間違えて床下からの通気をできなくしたため、単なるクッション材になってしまいました。高気密、高断熱がこれに拍車をかけ芳しからぬ結果招いているわけです。有機リン系のもうひとつの問題に可塑剤があります。これは、プラスチックばかりでなく、床を磨くワックスのなかにも含まれており、カーテンや絨毯の難燃剤にも含まれています。

Q、そのあたりを先生の症例からお話しください。

患者さんに計測してもらったデータをいただくと、可塑剤が結構出ていますね。問題のある住宅を見ますと、有機リン系の化合物というのは、空気一㎥当たり一〇〇ナノグラム位で症状が出てきます。トルエンのような揮発性の高い物質は一年もすれば消えますが、ホルムアルデヒドは芯まで染み込んで、なかなか放散しません。

また揮発性の遅いシロアリ駆除剤では、有害物質が五年位残留します。困ったことに、この影響が消える頃には防蟻効果も落ち、再度処理をせねばなりません。

「切れる」子供との関係は

Q、その他に注目すべき事例はありますか？

今、私たちの環境はホルモン系、免疫系、神経系の三つともおかしくなってきています。このうち、免疫系と神経系は短時間で反応を示しますが、ホルモン系（内分泌系）は症状が出るまでに時間が掛かります。大人でしたら頭痛等の症状を訴えるのですが、子供の場合、外から見えるのは免疫系のアレルギーだけです。

最近、学校においてアトピーだけでなく、喘息等の症状が見られます。一番の原因は校舎建て替え時の仮設校舎内の化学物質によるものと考えられます。この場合、空気清浄器を取り付けたら症状が緩和されました。

また昨今問題視されている「切れる子供」に関し、アメリカの研究事例があります。実際にごく少量の化学物質を付加した途端、子供の字の書き方に乱れが起こる等、学校で落ち着きのない子供と化学物質過敏症との関係を指摘する研究者が結構います。汚染物質は比重が大きいので室内の下部にたまりやすく、子供は鼻の位置が低くこの汚染物質を吸い込みやすいうえ、体重当たりの空気の摂取量が多いため影響を受けやすいと考えられます。

もちろん患者自身、自分で「切れる」とは言ってきません。「鼻血が出やすくなったとか、皮下出血するとか、間接が痛むとか」の症状で通院してきます。

さらに、ショッキングなことに、最近女性の妊娠・出産がスムーズにいかないことが指摘されており、特に男の子の死産が増えています。これは、「子供のからだ白書」にも掲載されています。

この先天異常を遺伝子の問題として研究する先生もおりますが、事の本質はそうではないように思います。時代と共に男女の生死が徐々に変化しているのは、間違いなく環境悪化の影響です。

分析事例を積み上げて

Q、最後に、本会の会員に向けて、ひとことお願いします。

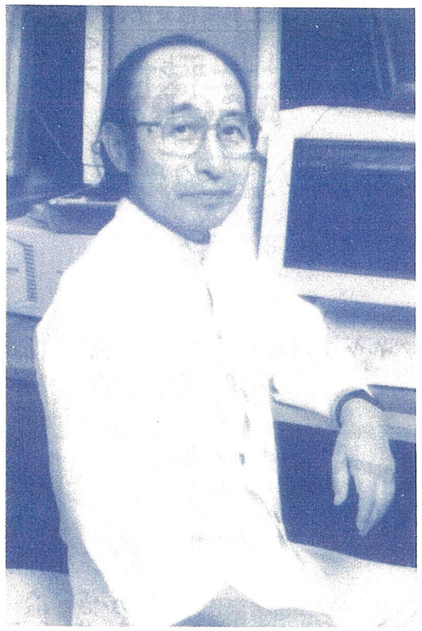
基本的に生物は自然環境に近い状態で育つのが一番健康的です。その意味では極度に抗菌、殺菌にこだわる昨今の生活は本来おかしなものです。自然に近い素材を使い、四季折々のものを食べ、その土地にあった生き方をしていくことが一番安全です。

そのなかでも、一番大切なものは飲食物の十倍以上を身体に取り込む空気です。それも人生の八割は室内空気を呼吸して過ごしますから、自然素材の持つ重要性がご理解いただけるものと思います。

先に静岡大学の吉田弥明先生を介してご相談がありました貴会の「新築現場の有害化学物質の検証試験」では、住民の問診調査を充実させること。さらにはビニルクロス、床のプラタイルの排除に向け、可塑剤関係に焦点を絞って室内空気の分析事例を積み上げ、無垢の木材を押し出すことです。新築病問題は、ホルムアルデヒドだけではないことをアピールしてゆくべきでしょうね。

（文責　編集室）

大変なんです、



北里研究所病院　臨床環境医学センター
部長　宮田幹夫（みやた みきお）氏

■プロフィール

1936年、名古屋市生まれ。眼科医になったきっかけは、子供の頃から非常に好きだった生き物の研究をしたいという想いから。趣味は、渓流釣りとハイキング。天竜川の源流まで遊びに行くことも。最近読んだ専門外の本で面白かったのは「ローマ人の物語」（塩野七生著）。好きな言葉は「師傅領進門、修学在個人」。B型。うお座。